

話し言葉における形容詞文の表現意図と 形容詞の意味の種類について

On Expressive Intent of Adjective Sentences and Semantic Types of Adjectives in Spoken Japanese Texts

張舒鵬

Abstract

This paper focuses on adjectival predicates in spoken language and examines the relationship between the types of adjectives and the speaker's expressive intentions. The data for the study was taken from film scenarios. The results of the study showed that in spoken language, evaluative adjectives are sometimes used for <forbidden> and <requested> intentions, but no such usage was observed for attributive adjectives or affective adjectives. Furthermore, evaluative adjectives are used more often for <evaluation of the other person's situation> than attributive adjectives and affective adjectives. This may be one of the features that distinguish evaluative adjectives from attributive adjectives and emotional adjectives. However, the connection and refinement between the intentions of the expressions in this paper were not fully considered. As we continue to deepen our understanding of the intent of expressions, we expect that the differences between evaluative adjectives and attributive adjectives and emotional adjectives will become even clearer.

Keywords

表現的意図、対他的、属性形容詞、感情形容詞、評価形容詞

expressive intention, inter-personal, attribute adjective, emotional adjective, evaluative adjective

1. はじめに

話し言葉において、話し手が発する一つ一つの文には、話し手による「表現の意図」が含まれている。例えば、以下の作例が示しているように、

- (1) (広い部屋に入って驚いて) うわ、広っ！
〈嘆き〉
- (2) (広い部屋に先に入ってから、部屋の外にいる友達に) ねえ、すごいわいよ。
〈教え〉
- (3) (路上で急に大声で歌いだした友人に) ちょっと、もう恥ずかしい……
〈感情の表出〉
- (4) (ホテルのロビーにいる恋人同士) ここいるの恥ずかしいじゃん。早く行こう。
〈感情の共有〉
- (5) (姉がわんわん泣く妹に対して) うるさい！！泣くな！
〈禁止〉
- (6) (話し手が自分をからかう友達に対して) うるさいな、俺を馬鹿にしてる？
〈不満の表示〉

話し手は(1)のような独話の場合でも、(2)～(6)のような聞き手がいる場面でも、何かしらの「意図」をもって発話していることがわかる。一つの文にどんな「表現の意図」⁽¹⁾が込められているかは、聞き手がいるかどうか、話し手が何を求めているか、または文の内容や文脈など様々な要素で総合的に決まる。

ところで、上記発話はいずれも形容詞文⁽²⁾の例を出しているが、それぞれどのような形容詞が使われているかに注目してみると、(1)(2)は属性形容詞「広い」、(3)(4)は感情形容詞「恥ずかしい」、(5)(6)はいわゆる評価の形容詞「うるさい」が使われている。さらに、<嘆き>の表現意図が認められる文には、「広い」のほかにも、「痛い」のような感覚を表す形容詞や「綺麗」のような評価を表す形容詞など、いくつかのタイプの形容詞が現れうるのに対して、<感情の表出>の文には「恥ずかしい」や「嬉しい」「悲しい」など、もっぱら感情形容詞が現れる。さらに、<禁止>の文に使われうる形容詞は「危ない」(「危ない！とまれ！」)や「駄目」(「ダメ、近寄らないで」)のようなものに限られている。このように、当然のことではあるが、発話の「表現の意図」によって、文にどんなタイプの形容詞(「属性形容詞」「感情形容詞」「感覚形容詞」など)が現れうるかはある程度決まっており、言い換えれば、形容詞の意味の種類と発話の表現の意図との間に関わりがあると言える。

文のタイプと形容詞の語彙的意味との相関に言及した研究は、たとえば宮崎(2002)が挙げられる。宮崎(2002)が認識的意味のタイプとして<主観的評価>を挙げ、その「意味の実現は、もちろん、述語となる単語(主に形容詞)の語彙的意味と関わっている。『面白い、くだらない、すばらしい、美しい、頼もしい、真面目だ、勤勉だ、哀れだ、立派だ、傲慢だ、優れている、変わっている』など、対象を話し手の価値基準によって主観的に評価する意味をもつ単語の無標形式を述語とする文は、<主観的な評価>を表すのが普通」(p.131)と述べている。また、仁田([1997]2009)では、<事態即応型>の未展開文を説明している際に、生理感覚を表す「寒い」や「熱い」「痛い」や味覚を表す「うまい」などの形容詞を用いた例を挙げている。さらに、「わあ、でっかい！」の例を挙げ、「対象の属性的なあり方を捉える表現は、(略)既に分析的表現であることによって、未展開文ではなく、省略文である」(同p.279)と述べているように、形容詞の意味の種類が異なると、文のタイプも変わると示唆している。

以上のように、研究の立場や目的は異なるが、一部の文のタイプに応じて、そのタイプの文に用いられる形容詞の意味の種類が決まってくるとの指摘が散見される。ただ、形容詞側に焦点を当てたうえで、話者の表現の意図による文分類において、それぞれのタイプの文にどのような形容詞が入るかというような研究は、管見の限り見当たらない。

(1) 「表現の意図」、また「表現意図」という用語については、山岡(2008)によると、最初に用いられたのは国立国語研究所(1960)であり、「その実施は対人的コミュニケーション機能であり、発話機能に相当するものである」(p.20)ということである。さらに、「日本でも90年代からコミュニケーション・アプローチや機能シラバスが普及するようになり、日本語教科書においても実際に「発話機能」という名称が用いられるようになっていく」(pp.20-21)と述べている。本稿の主眼は表現意図または発話機能の精密化にないが、以降、話し手と聞き手の間のこのようなコミュニケーション機能のことを、「表現意図」と呼ぶ。

(2) 品詞の観点で文を見る場合、動詞述語文や名詞述語文などもあり、同じく話し手のさまざまな表現の意図が認められるが、本研究は形容詞の研究として、以下、形容詞文だけに注目して考察していく。

ところで、筆者はこれまで日本語の形容詞に評価形容詞の類を認めただうえで、評価形容詞の位置づけを明らかにすべく、張(2016, 2019)などで論考を重ねてきた。本稿はその一環として、話し手の表現意図と形容詞の意味のタイプの関係という観点において、評価形容詞と属性形容詞・感情形容詞との違いを明らかにしたい。そこで本稿では、話者の表現の意図という観点で文の分類を行い、映画のシナリオから集めた形容詞文の例を研究対象とし、文のタイプと形容詞の意味の種類との関係を整理する。

2. 先行研究

2.1. 形容詞の意味の種類と評価形容詞

本稿は、形容詞には属性形容詞、感情形容詞、評価形容詞の3類がある立場から、話し手の表現意図と形容詞の意味の種類との相関という観点において、評価形容詞とその他の形容詞(属性形容詞・感情形容詞)との違いを明らかにするためのものである。形容詞の分類については、国立国語研究所(1972)は、単語の意味の違いと、語としてのふるまいの特徴の違いの観点で、「属性形容詞」と「感情形容詞」に分けている。意味の面では、「大きい、白い、高い」などの属性形容詞は「ものや人の性質や状態、動きのようすなどを表わし、客観的な性質・状態の表現をなす」とし、「うれしい、懐かしい、いや」などの感情形容詞は、「人間の主観的な感覚・感情を表わす」としている(p.21)。さらに、中間的なもの(「面白い、怖い、かわいい」など)の存在を指摘している。張(2016)では、国立国語研究所(1972)で中間的なものとされたものを「評価形容詞」と呼び、「思ウ」認識動詞構文を用いてそれと属性形容詞・感情形容詞との異同を考察したうえで、「評価形容詞」を属性形容詞・感情形容詞から別立てする必要があると主張した。さらに、張(2019)では、連体修飾における評価形容詞と属性形容詞・感情形容詞のふるまいの異同を考察した。このように、形容詞における評価形容詞の位置づけを明らかにするためには、複数の視点からの考察が不可欠である。本稿もその考えの下で考察を行っていくものである。

2.2. 表現意図

宮地(1960)では、「表現意図」を「言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことである」(p.86)と規定している。さらに、宮地(1963)では、「表現意図」について、「意味の面から文を成立させる力の基底を追究する考えかたに立っており、話し手と聞き手とのあいだの言語的勢力圏の張りあい、話し手の側から見て秩序づけるものであって、それ自体外的言語形式を持つものではないし、すべて対応する外的言語形式を持つという保証もない。そこで、その範囲を限定して、ここで扱うのは“社会習慣としての言語形式との対応を持つ表現意図”」(p.31)とし、文法的形式に重点を置くいわゆる「陳述」と区別している。宮地(1963)の表現意図の分類は図1に示される通りである。

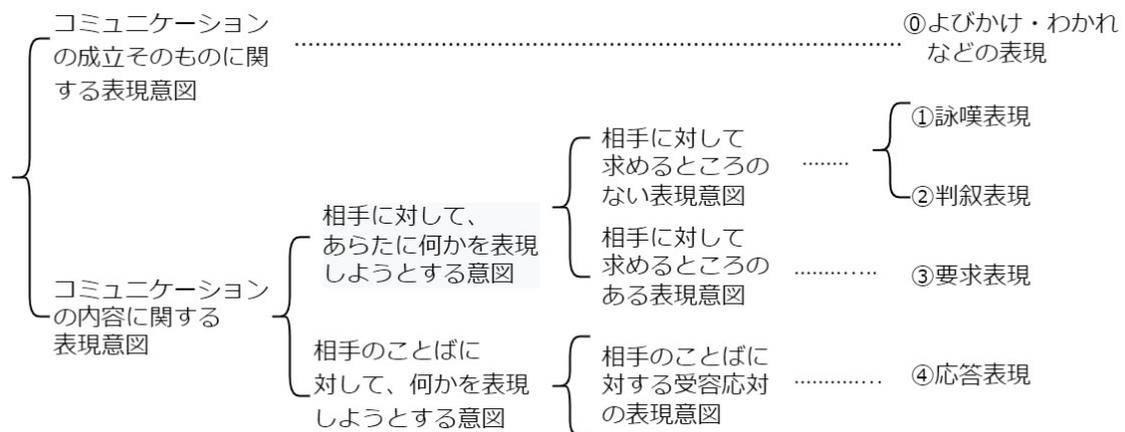


図1 宮地(1963)による表現意図の大分類(p.32)

それぞれの例文は次のとおりである。

- ・ミナサン！（よびかけ・わかれなどの表現）
- ・ウマイ！（詠嘆表現）
- ・コレハ モウ カナリ オチツイテ キテ イマスネ（判叙表現）
- ・こん中ではさあなたが一番甘党ね？（要求表現）
- ・ソウヨ。（応答表現）

宮地(1960, 1963)

2.3. 「言表の対他的意志の分類」と「言表行為としての文／内容自立の文」

尾上（[1975]2001）では、一語文の呼びかけの用法に注目し、その呼びかけの実現の仕方の分類を行った。そして、「結局、呼びかけの実現の仕方の分類とは、言語表現一般の問題として、言表に担われ得る対他的意志そのものの分類にほかならず、それは表現意図の分類、網羅という作業の一部として位置づけられるべき性質のものである」（p.57）と述べている。ここでの「対他的意志」は話し手・聞き手が存在するコミュニケーションの場における、話し手から聞き手に向ける意志のことだと考えられる。

さらに尾上（2014）では、言表行為の文と内容自立の文を解説する際に、上記対他的意志のタイプをそのまま、「言表行為としての文」の片方である「相手（聞き手あるいは手紙などの読み手）に対する言表行為（対相手的行為＝働きかけ）である文」と捉えなおしている。もう片方は「相手不要（非働きかけ）行為の文」としている。以下の図2で、尾上（[1975]2001, 2014）の言表行為としての文の全体像を示す。例文を引用しながら互いの関係を示しておく。

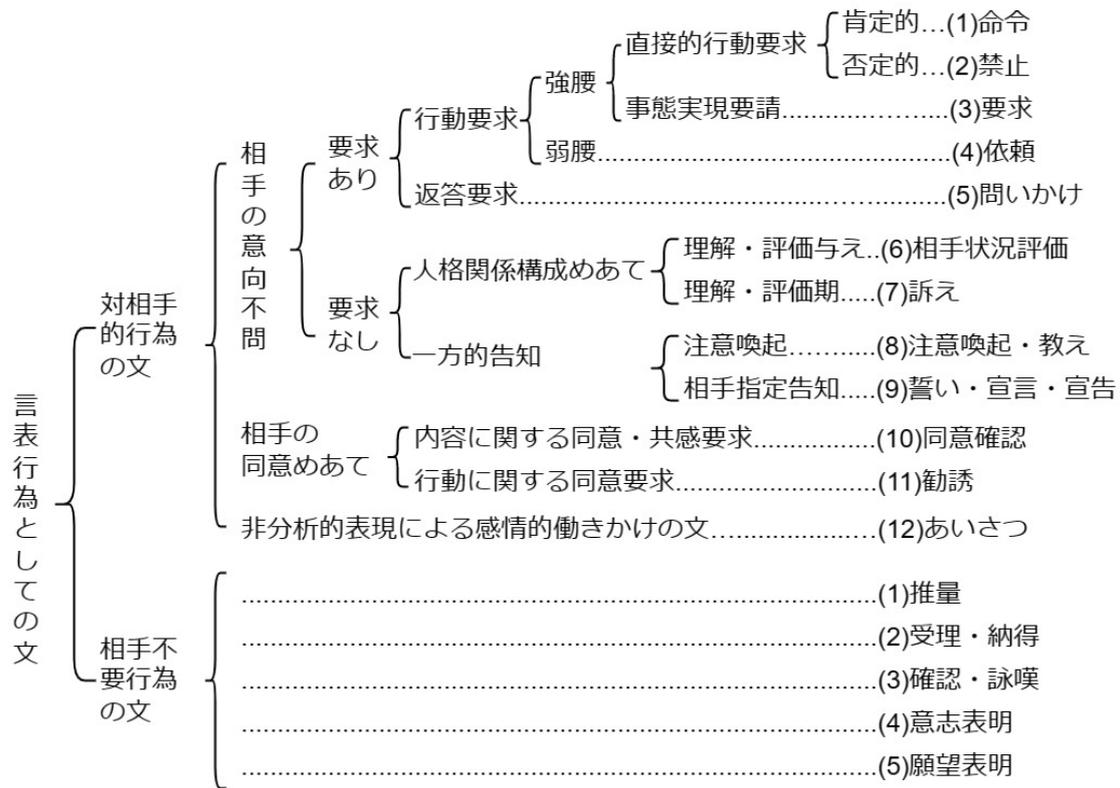


図2 尾上(1975, 2014)の言表行為としての文の全体像⁽³⁾

相手(聞き手あるいは手紙などの読み手)に対する言表行為(対相手的行為=働きかけ)である文=「対相手的行為の文」は以下のように示しておく。

- ・〈命令〉:おーい中村君 ちょいとまちたまえ
- ・〈禁止〉:泣くなよ妹よ 妹よ泣くな
- ・〈要求〉:おうい、みよ子、お茶。
- ・〈依頼〉:おつた、おれと別れてくれ。
- ・〈問いかけ〉:大山さん、あしたも行く？
- ・〈相手状況評価〉:父よあなたは強かった
- ・〈訴え〉:おかあさん、おなかが痛いよウ。
- ・〈注意喚起・教え〉:次郎ちゃん、あぶない！
- ・〈誓い・宣言・宣告〉:大山君、君はクビだ。わかったか。
- ・〈同意確認〉:大山君、寒いね。
- ・〈勧誘〉:大山さん、一緒に飲みませんか？
- ・〈あいさつ〉:大山君、おめでとう。

尾上 ([1975]2001: pp.59-69)

(3) 尾上 ([1975]2001:70, 2014:561)の表や文言を参考にして筆者が作成。

一方、「相手不要（非働きかけ）行為の文」は以下のものがある。

- ・〈推量〉: あしたは寒いだろう
- ・〈受理・納得〉: なんだ、もう終わったのか／おお、初雪だ
- ・〈確認・詠嘆〉: たしかに今日は寒い
- ・〈意志表明〉: 一人で帰ろう／わしは漫才師になる
- ・〈願望表明〉: 早くおわってほしい／終わってくれないかなあ／もう終わってくれ

尾上(2014: 561)

2.4. 疑似独話

以上見たように、尾上([1975]2001)では、一語文の呼びかけの用法を手掛かりに「対他的意志」(「表現意図」の一部)を分類した。さらに、尾上(2014)では、言表行為という観点で文を「対相手的行為の文」と「相手不要行為の文」の2つのタイプに分け、「対他的意志」のあるものは前者として捉えなおした。しかし、後者の「相手不要行為の文」には「対他的意志」がないのかというと、そう言い切れないと考えられる。つまり、話し手が単独行動をしている中での発話(独話)の場合を除き、複数人がいる場面では、聞き手への直接的な働きかけがないとしても、聞き手への何かしらの「表現意図」があるように感じられる場合があるのである。聞き手への働きかけはないものの話し手が何かしらの意図をもって聞き手に言い聞かせているようなケースは尾上(2014)では捉えきれないように思われる。

上記のようなケースについて、野田(2006)は典型的な対話と独話との間に「疑似独話」の存在を認め、その現れ方と表現効果を考察した。「聞き手となりうる人物の存在を意識したうえで、独話であるかのように発話されたもののみ、疑似独話とみなす」(p.194)と規定している。さらに、「意図的に独話の形が選ばれることを擬似性と」(p.196)呼ぶとし、疑似性の弱いもの(「思考や情報処理の過程を表す発話と心情を表出する発話」(p.196))・強さが中間的なもの(「羨望を表すもの、不満を表すもの、聞き手に間接的に行為を促すものなど」(p.199))・強いもの(「話し手の不快感を聞き手に認識させることによって、非難を表現するもので」(p.201))に分けた。

尾上([1975]2001, 2024)の文の分類は、聞き手への働きかけがはっきり認められる場合や独話の場合にいて適用されやすいが、しかし実際の発話の場面では、話し手は常に聞き手の名前を呼びながら話していないし、聞き手に聞こえるよう意識しながらあえて独話の形をとることも多い。そのような場合、野田(2006)の「疑似独話」の考え方を取り入れることによって、話し手から聞き手への何かしらの意図の認定がしやすい。本稿は以下の分析において、尾上([1975]2001, 2004)の分類をベースにしつつ、聞き手への働きかけが不要であるものの聞き手が存在するものについては、野田(2006)の「疑似独話」の観点で考察する。

3. 調査方法と考察対象

発話の表現意図と形容詞の意味の種類との相関を考察するために、映画のシナリオから形容詞文を収集したうえで、文全体の表現意図が何かを分析・整理することにした。

調査資料については、リアルな会話を収録した話し言葉コーパスの利用や、一応編集作業を経たシナリオ集が候補として考えられるが、限られた時間の中で多種類の形容詞を収集し、かつ、外形による分類ができないので目視で表現意図を分類せざるを得ない(アプリケーションに任せた収集分析が困難)という実践的制約に縛られた中で、後者は編集されているとはいえ、会話文が集中的に表れ、かつ、話し手聞き手関係が明瞭に分かる例が多く、スタイルも限りなくリアルな会話に近いという長所が考えられる。したがって、本稿では映画のシナリオを調査資料とする。

調査方法は以下の通りである。『月刊シナリオ』から舞台が現代で標準語が使われている映画の脚本を9本選び、中から作中人物の会話や独り言に現れた形容詞文の全例を抽出して、考察対象とした。ただし、[Vテ/バ/ト+よい](「お願いしていいですか/普通にしてればいいよ/受かるといいね」)や[Vテ+駄目だ](「こんなことしちゃだめよ/」)、[Vタ+ほうが+よい](「どっかに相談したほうがいいじゃん」)、[V+わけ+ない](「(野球に)慣れるわけないだろ」)など、形容詞が文型の一部となるような例は考察対象から除外した。また、「ヤダ! ヤダヤダヤダ! 何でそんなこと言うの」や、「そんなの関係ないんだっ!!! くやしい!!! くやしい!!! くやしい!!! どうしてわたしだけ?」のように、同じ形容詞を短い時間で複数回使用する表現については、出現するたびに1例とカウントすることにした(たとえば、「ヤダ! ヤダヤダヤダ」なら、4例とカウント)。用例を収集した後に、映画を映像で視聴して用例が出ている場面を確認した。とりわけ話者の語気や、話者が聞き手に向かって話をしているか、疑似独話的に話をしているかなどに留意した。そのうえで、用例を対話のもの(対他的意志が強く出る)、疑似独話、独話に分けておいた(対話:869例、疑似独話:147例、独話:10例)。さらに、前述した先行研究に従い、話者の対他的意志または疑似独話の疑似性について分類を行った。作品ごとの用例数と合計用例数を下記のように示す。

『ミッドナイト・バス』(バス):84例/『モリのいる場所』(モリ):67例/『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』(志乃):74例/『こどもしょくどう』(しょくどう):49例/『喜劇 愛妻物語』(愛妻):234例/『ホテルロイヤル』(ホテル):107例/『子供は分かってあげない』(子供):139例/『明け方の若者たち』(若者):141例/『ちょっと思い出しただけ』(思い出した):131例

(合計:1026例)

また、本稿の調査で抽出した形容詞とその用例数は次の表のとおりである。

表1 収集した用例の形容詞と用例数

≧50	良い(204)、大丈夫(71)、ない ⁽⁴⁾ (59)
10~49	好き(43)、凄い(32)、嫌(25)、無理(23)、うるさい(23)、本当(19)、怖い(18)、悪い(18)、楽しい(15)、まじ ⁽⁵⁾ (13)、綺麗(12)、仕方ない・しょうがない(6/6) ⁽⁶⁾ 、痛い(11)、元気(10)、美味しい(10)、大変(10)、ださい(10)、やばい(10)、多い(10)、嬉しい(10)
≧9	格好いい(9)、欲しい(7)、当たり前(7)、忙しい(6)、平気(6)、最高(6)、邪魔(6)
各5	もったいない、可愛い、遠い、臭い、最悪、熱い、危ない、美味しい、遅い、悔しい、可哀そう、幸せ
各4	あり得ない、早い、寂しい、うざい、面白い、下手、残念、近い、上手い、結構、恥ずかしい、つまらない、優しい、ひどい
各3	普通、羨ましい、おかしい、ずるい、しつこい、気持ち悪い、だるい、詳しい、汚い、素敵、広い、珍しい、高い[金額が]、眠い、つらい、最低
各2	甘い[態度・基準]、大事、青い、強い、でかい、寒い、楽、きもい、下手くそ、しんどい、意外、きつい、楽しみ、怪しい、ちよろい、暇、不機嫌、情けない、高い[程度が]、心配、安い、深い、大好き、冷たい[態度が]
各1	半端ない、危険、おしゃれ、いろいろ、暗い、細かい、立派、気楽、嫌い、えらい、同じ、感じ悪い、自信満々、迷惑、自由、大きい、失礼、懐かしい、仲良い、若い、痛い[言動]、皆無、鈍くさい、弱い、非常識、必要、まずい[不都合]、不公平、まっぴら、変、みっともない、無神経、少ない、甘い[味覚]、気持ち良い、退屈、くだらない、大げさ、強制的、極端、暖かい、格調高い、申し訳ない、長い、真っ暗、親しい、特別、辛気臭い、悲しい、苦手、微妙、静か、惜しい、貧乏、絶好調、不謹慎、絶妙、苦痛、前向き、素晴らしい、軽い、にぎやか、騒がしい、頑固、お節介、充分、十分、重い[態度]
	(合計1026例、異なり語数:164語)

表2 意味的種類別の内訳

評価 形容詞 異なり語数: 62語	良い(204) 大丈夫(71) 凄い(32) うるさい(23) 悪い(18) 綺麗(12) 美味しい(10) 大変(10) ださい(10) やばい(10) 格好いい(9) 最高(6) 邪魔(6) もったいない(5) 可愛い(5) 臭い(5) 最悪(5) 危ない(5) 美味しい可哀そう(5) うざい(4) 面白い(4) 下手(4) 上手い(4) つまらない(4) ひどい(4) 優しい(4) おかしい(3) ずるい(3) しつこい(3) 汚い(3) 素敵(3) 珍しい(3) 最低(3) 甘い[態度・基準](2) 下手くそ(2) 意外(2) 怪しい(2) ちよろい(2) 冷たい[態度が](2) きつい(2) 半端ない(1) えらい(1) 感じ悪い(1) 失礼(1) 鈍くさい(1) 不公平(1) 変(1) みっともない(1) 無神経(1) くだらない(1) 大げさ(1) 辛気臭い(1) 微妙(1) 素晴らしい(1) 頑固(1) お節介(1) 重い[態度](1) 痛い[言動が](1) まずい[不都合](1) おしゃれ(1) 迷惑(1) 惜しい(1)
属性 形容詞 異なり語数: 66語	ない(59) 本当(19) まじ(13) 多い(10) 元気(10) 当たり前(7) 仕方ない(6) しょうがない(6) 忙しい(6) 遠い(5) 遅い(5) 幸せ(5) あり得ない(4) 早い(4) 近い(4) 結構(4) 普通(3) 詳しい(3) 広い(3) 高い[金額が](3) 大事(2) 青い(2) 強い(2) でかい(2) 楽(2) 暇(2) 不機嫌(2) 高い[程度が](2) 安い(2) 深い(2) 危険(1) いろいろ(1) 暗い(1) 細かい(1) 立派(1) 気楽(1) 同じ(1) 自信満々(1) 自由(1) 大きい(1) 仲良い(1) 若い(1) 皆無(1) 弱い(1) 非常識(1) 必要(1) まっぴら(1) 少ない(1) 強制的(1) 極端(1) 格調高い(1) 長い(1) 真っ暗(1) 親しい(1) 特別(1) 静か(1) 貧乏(1) 絶好調(1) 不謹慎(1) 絶妙(1) 前向き(1) 軽い(1) にぎやか(1) 騒がしい(1) 充分(1) 十分(1)
感情 形容詞 異なり語数: 36語	好き(43) 嫌(25) 無理(23) 怖い(18) 楽しい(15) 痛い(11) 嬉しい(10) 欲しい(7) 平気(6) 熱い(5) 悔しい(5) 寂しい(4) 残念(4) 恥ずかしい(4) 羨ましい(3) 気持ち悪い(3) だるい(3) 眠い(3) つらい(3) 寒い(2) きもい(2) しんどい(2) 楽しみ(2) 情けない(2) 心配(2) 大好き(2) 嫌い(1) 懐かしい(1) 甘い[味覚](1) 気持ち良い(1) 退屈(1) 暖かい(1) 申し訳ない(1) 悲しい(1) 苦手(1) 苦痛(1)

表1から分かるように、「良い」は圧倒的に数が多く、全用例の2割ほどを占めている。次に用例数が多いのは「大丈夫」と「ない」である。また、「好き」の例も43例と多いが、一部のシナリオには告白のシーンや、好き嫌いを語るシーンなどがあるのが原因だと思われる。

- (4) 物の非存在を表す「箸、なかったね」のような例のほか、「食欲がない」や「関係がない」、「そんなことないよ」などの例も集計した。
- (5) 「マジ」のいずれの例も「え、マジすか?」「マジかよ!」のようなものだが、「真面目」の略で品詞が形容詞なので、集計しておいた。
- (6) 「仕方ない」「しょうがない」は意味がほとんど同じだと考えられるので、便宜上、一つにまとめた。

表2を見てみると、属性形容詞は典型的なものとして「多い」「遠い」「遅い」「早い」「詳しい」「広い」などがあるが、用例数は多くない。感情形容詞は「好き」「怖い」「楽しい」「嬉しい」「欲しい」などがあり、用例数は相対的に多いほうだが、異なり語数は少ないほうである。一方、評価形容詞については、「良い」「凄い」「綺麗」「大変」など代表的なものの1語あたりの用例数が多いし、異なり語数も多く、バリエーションが豊富である。

4. 形容詞文の表現意図のタイプと形容詞の意味の種類

4.1. 話し手から聞き手への働きかけが明確な場合

対話の文869例を、尾上(2014)の言う「対他的行為の文」の下位分類に従って分析した。尾上(2014)が文を網羅的に取り扱うものであるのに対し、本稿は形容詞文のみを対象としているので、上記12タイプのうち、(1)命令、(4)要求、(11)勧誘などの用例は見当たらなかった。以下、実例とともに、下位分類と、その文に現れる形容詞の意味の種類を見ていく。

4.1.1. 〈禁止〉

〈禁止〉の文は本来動詞述語文の種類と考えられるが、次のような場面では、話し手が強い口調で発話して聞き手の動作を止めようとする。

- (7) 【夫婦】⁽⁷⁾サングラスかけたチカが運転して豪太が助手席にいる。アキは後部席。
豪太「……大丈夫？」
チカ「うるさい⁽⁸⁾。3年振りの運転なんだから話しかけるな」(愛妻)
- (8) 【父娘】フェリーからアキが飛び出してくる。アキを追って、豪太も走ってくる。
豪太「アキ！危ないよ!」(愛妻)
- (9) 【夫婦】そう言う豪太もすでに泣いている。(略)
チカ「うるさい……。うるさい泣くな。(略)」(愛妻)
- (10) 【夫婦】チカ「(不機嫌に)ちょっと。セックスなんかしないからね、こっちは疲れてんだから」
豪太「いやマッサージだよ」
チカ「だからいいって、下手くそだし」(愛妻)
- (11) 猫の水を取り換える。
照生「モンジャ、モンジャー。ダメだってもう」
飼い猫のモンジャ、戸棚を散らかしていた。(思い出した)

(7)(8)の例では、聞き手が話しかけたり泣いたりするのを、話し手は「うるさい」と発することで制止しようとしている。さらに「うるさい」と発した後に、「～な」と禁止する動作

(7) 登場人物の関係や身分について、適宜【 】の形で記しておく。

(8) 用例にある下線は筆者によるものである。以下同様。

を明示している。それ以外の例文でも、聞き手の今の行動を止めようと、当該の述語文を発したと捉えられる。なお、<禁止>に現れる形容詞は「うるさい」「危ない」「駄目」「良い」などで、限定的である。

4.1.2. <依頼>

尾上 ([1975]2001)によると、<依頼>は弱腰の行動要求である。

- (12) 【友充と美波は父娘、門司と美波は同じ高校の生徒】友充、門司の前の猪口に酒を注いで。
友充「飲みなさい」
門司「……え」
友充「いいから」
門司「……え、なんで」
友充「決まってるだろ、君が私から美波をさらって行くからだよ」(子供)
- (13) 【友充と美波は父娘】友充「なあ、テレビ、見ないのか？」
美波「ああ、見たいの、どうせ映んないもん」
友充「なんてやつよ」
美波「…言ってもわかんないし」
友充「いいから」
美波「(ぼそ)魔法左官少女バツファロー KOTEKO」(子供)
- (14) 曲を聴きながら、僕、彼女を抱きしめて頭の匂いを嗅ぐ。
彼女「ダメだよ、くさいよ？」
僕「ううん、好きな匂い」(若者)
- (15) 僕「もしも死んだら、俺も一緒に死ななきゃいけない」
彼女「なんでよ」
僕「いなくなったら、もうこっちも死んでるようなもんだから」
彼女「ダメだよ。ちゃんと生きてね」(若者)
- (16) 【友充と美波は父娘】友充、部屋に入ってくる。美波と対峙するように座る。
美波「目は？ 瞑る？」
友充「大丈夫、開いてて」(子供)

話し手は(12)ではお酒を飲むという行動を、(13)では、テレビ番組名を教えてくれることを聞き手に要求している。また、(14)では、聞き手が自分の頭の匂いを嗅いでくることを弱腰で断っている。(15)の「だめだよ」は「死なないで」という意味の発話で、聞き手の言動を弱腰で制止している。また、(16)では、少し心配している聞き手に対して、話し手が発した「大丈夫」には「心配しないで」という意味が込められている。一種の弱腰の行動要

求⁽⁹⁾といえる。このタイプの文には、「良い」(いいから)、「駄目」(だめだよ)、「大丈夫」の用例が観察された。

4.1.3. 〈問いかけ〉

〈問いかけ〉の文はいわゆる「疑問文」だが、用例数が105例あった。(17)(18)(19)はいわゆる「Yes-No」疑問文で、(20)は疑問詞疑問文である。また、(21)(22)のような「聞き返し」のパターンもあった。また、形容詞の種類に関しては、特に偏りはなかった。

- (17) その横に、小学一年生くらいの男の子が一人いる。覇気のない表情で飯を食うその姿は、まるでタカシのようだ。
佳子「おいしい？」
小学生「……(小さく頷く)」(しょくどう)
- (18) 【会社の先輩後輩】げっそりとした僕、入社してくる。一同の視線、集まる。
中山「おお、大丈夫か」
僕「ご迷惑おかけしました」(若者)
- (19) 【友人どうし】尚人「んー、まあ、なんとか頑張ってみるわ。そっちは？」
僕「俺も、少しだけ、動き出してる」
尚人「お、マジ？」
- (20) 【恋人どうし】彼女「ねえ、音楽何が好き？」
僕「あー……RADとか」(若者)
- (21) 【恋人どうし】志穂「(嬉しそうに)そう？息子さん、あんなに大人だったとは思わなかったなあ。若くて、格好良くて」
利一「格好良い？あれが？」(バス)
- (22) 【水島は建設会社の社長、秀子は住民】
水島「…とにかく、あの看板を撤去してもらわないと、我々は、強制的な手段をとらざるをえませんから」
秀子「強制的？」
水島「訴えます」(モリ)

4.1.4. 〈相手状況評価〉

尾上 ([1975]2001)によると、〈相手状況評価〉は、「相手の状況に評価を加えることによって話し手の方から相手との間にある種の関係を構成しようとするものである。話し手の方から呼びかけ相手に対して評価・判断内容を背負ったことばを投げ与えるという、言

(9) 尾上 ([1975]2001)では、強腰の行動要求に、行動を「する」「しない」で〈命令〉と〈禁止〉に分けているが、弱腰の行動要求(〈依頼〉)では「する」「しない」を分けていない。本稿も尾上 ([1975]2001)に従って、(14)(15)(16)のような弱腰の行動制止は〈依頼〉に入れている。

わば向こう向きの矢印である。」(p.63)。次の用例が〈相手状況評価〉のものである。

- (23)おばさん店員「ね、もうしないもんね。ダメよ、こんなことしちゃ。はい一つ上げるから行きな」とミチルを帰してやる。
中年店員「甘いねえ。ああいうのが公園のトイレに赤ちゃん捨てるようになるんだよ」(しょくどう)
- (24)【兄妹】怜司「(階下に)父さん！変な生き物がいる！」
彩菜「変な生き物って失礼ですね。魔法使いだニャ」(バス)
- (25)【クラスメイトどうし】志乃、ギターを持って、片手にはメモを持ち、『きかせて！』
加代「あんた……けっこう頑固だね」(志乃)
- (26)【元夫婦】美雪「父より先に私がダメになりそう」
利一「洒落にならないぞ、共倒れなんてことになったら」
美雪「優しいのね」(バス)
- (27)【兄妹】怜司「何言ってるんだよ、お前。何だよ、アヤニャンって」
彩菜「もう、うるさいニャ。質問は、許可しませんー」(バス)
- (28)【藤田は写真家】秀子、自分の写っている写真を苦い顔で見ている。
秀子「熊みたい」
藤田「…熊ですか？」
秀子「いやだわ、こんな写真」
藤田「そうですか？ 素敵ですけどねー」(モリ)
- (29)【クラスメイトどうし】菊地「……お前、だせーよ」
志乃、ピクツとする。
菊地「空気消して……私なんかどこにもいませんって振りして……だせーよ、すっげーカッコわりーよ！」(志乃)

〈相手状況評価〉の例は148例と、かなり多かった。現れている形容詞は話者の主観による判断、すなわち評価的な意味を帯びたものが多い。

4.1.5. 〈訴え〉

このタイプの文は、話し手自身の状況や感情を聞き手に伝え、理解・同情を期待するものである。尾上([1975]2001)によると、〈訴え〉は上述の〈相手状況評価〉とは逆に、「こちら向きの矢印の認知関係を構成しようとする」(p.64)と述べている。

- (30)【友人どうし】乾杯する僕と尚人。
僕「思ったより元気そうじゃん」
尚人「なんとかやってるよ、超しんどいけど」(若者)

- (31) ヒカル、ベツをかき出して、
ヒカル「ねえ行こうよ！パパとママのどこ行こ！もうヤダよー。ねえ ウワーン」
(しょくどう)
- (32)【元夫婦】利一「連絡してないのか？携帯の番号、教えただろう」
美雪「怖いの、話すのが」
利一「あまり考え込むな」(バス)
- (33) 美雪、瞳を潤ませ、片手で顔を覆う。
美雪「ごめんなさい。最近感情を抑えられなくなって……私、おかしいの」(バス)
- (34)【クラスメイトどうし】志乃、ムキになってハンドルを抜こうとするが抜けない。
なんとか頑張って抜き取ると、その弾みで並んでいる自転車がドミノのように倒れてゆく。志乃、倒れた自転車をもどかしく見つめる。
声「いてーよ」
志乃、はっとして顔を上げる。倒れた自転車の向こうで、加代がギロッと志乃を睨みつける。(志乃)

〈訴え〉と解釈できる用例は50例あった。感情を表す「つらい」「しんどい」「怖い」「嬉しい」「好き」や感覚を表わす「痛い」「気持ち良い」などの用例があった。

4.1.6 〈告知・返答〉

このタイプの文は、尾上([1975]2001)における〈教え〉と〈誓い・宣言・宣告〉を合わせたものである。尾上([1975]2001)は〈注意喚起・教え〉と〈誓い・宣言・宣告〉の違いについて、「話し手の方の文だけを取り出して見たときには一見区別がつきにくいのが、具体的な相手を前にしての現場的な告知のあり方としては大いにちがう。相手の目の動きを理想的に実現すれば、(略)〈注意喚起・教え〉では、「大山君、」の呼びかけによって、ハッと顔を上げ、話し手の目を見るのであるが、(略)〈誓い・宣言・宣告〉では、あらかじめ話し手の目を見ていた相手が「大山君、」の呼びかけに応じてコックリと一度うなずくのであり、両者「の告知のあり方にはこれだけの差がある」(p.66)と述べている。ただ、本稿の考察では、〈注意喚起・教え〉と〈誓い・宣言・宣告〉とで形容詞の現れ方に違いが観察されないので、2つを合わせて、〈告知・返答〉と呼ぶ。用例は以下のようなものがある。

- (35)【元夫婦】美雪「彼女に置いて行かれるのが怖くなったから、それで、自分が置いて行くことにしたのよ」
利一、ソファから立ち上がる。
利一「ご馳走様。コーヒー、美味かったよ」(バス)
- (36)【恋人】志穂「ほとんど積もってないのね、新潟ってすごい雪だと思ってたけど」
利一「山の方はもう雪が深いけど……」(バス)

(37)【奥さんと客人】秀子「お待たせして、すみません」

朝比奈「はい」

秀子「今、忙しいそうです」(モリ)

(38)【母娘】由美「おかえり どうだった？」

志乃「うん、大丈夫だったよ」(志乃)

〈告知・返答〉の例は370例あり、対他的意志のタイプの中でもっとも用例が多いタイプである。

4.1.7. 〈同意確認〉

このタイプの文は、ある状況をめぐって、話し手が聞き手に同意や共感を求めるものである。いわゆる「確認要求」の文、「同意要求」の文の一部がこのタイプに含まれる。

(39)【元夫婦】美雪「ごめんなさい。ちょっと、めまいが」

利一「送ってやるよ」

美雪「大丈夫」

美雪、立ち上がろうとするが、よろけてしまう。その体を利一が支える。

利一「大丈夫じゃないだろう」(バス)

(40)【夫婦】豪太「いやでも、チカちゃんが育休中のときとかパートに出たじゃん」

チカ「当たり前でしょそんなの。(略)」(愛妻)

以上、対他的意志のタイプの用例を見てきた。対他的意志のタイプと形容詞の意味的種類の関係を次のようにまとめる。

表3 対他的意志のタイプと形容詞の意味の種類

	禁止 13例	依頼 19例	問いかけ 105例	相手状況評価 148例	訴え 50例	告知・返答 370例	同意確認 152例	挨拶 12例	合計
属性形容詞	—	—	33(15%)	27(12%)	5(2%)	110(51%)	42(19%)	—	217
感情形容詞	—	—	20(15%)	11(8%)	22(16%)	67(49%)	16(12%)	—	136
評価形容詞	13(3%)	19(4%)	52(10%)	110(21%)	23(4%)	193(37%)	94(18%)	12(2%)	516

4.2. 疑似独話

疑似独話は話し手が直接に聞き手に向かって発話するのではなく、独り言風に話すことによって聞き手に何かしらの意図を表す場合のことだが、例は147例あった。野田(2006)に従って、疑似性の強弱で例文を見ていく。

疑似性の弱いもの：話者の思考過程や心情を表わすものである。いわゆる〈受理・納得〉のものであるが、独話との区別がつきにくい。場面に聞き手がいるという理由で、本稿では独話と区別しておいた。

- (41) 阿堀師匠(70)と娘のハナエ(43)が、こっちを見て興奮している。
阿堀「生き別れだ！ 生き別れ！」
ハナエ「ホントだ！ やだ！ あんな大きくなって！」(子供)
- (42)【美波は高校生、阿堀は父の知り合い】友充と美波。友充はカラフルな酒を飲み、美波はかき氷を食べている。(略)
阿堀「……」
美波「(息をとめている)……」
阿堀「……………」
美波「(息を吐いて)はっ……ダメだ、全然わかんない」(子供)
- (43) 監督「じゃあ最後に部長、後輩たちに」
水田「(大号泣で)すみません、無理です～」
監督「無理かー、じゃ、解散。おつかれー」(子供)
- (44)【同じ高校の生徒どうし】美波 「あねえ、ジュラクサンドMEIも描ける？」
門司「ああ、うん、描けるよ」
美波「SHIKKUI村樫は？」
門司「ああ、村樫もたぶんいけると思う」
美波「まじかー、すごいね」(子供)

疑似性の強さが中間的なもの:話者の羨望や聞き手への間接的な依頼要求などが該当する。

- (45)【恋人どうし】葉「なに、さっきから何怒ってるの？」
照生「いや別に」
葉「どんな照生君もいいけどなあ」(思い出した)
- (46)【アキは由美の女友達の娘】アキは由美の膝で料理を食べている。
由美「かわいいなー。ウチも見てもらおうかな旦那」(愛妻)

疑似性の強いもの:聞き手への不満などを間接的に伝えるものである。

- (47)【佳子とユウトは母子】佳子「イライラしないでよ。タカシ君は？」
ユウト「あっち」
タカシ、離れたところで一人佇んでいる。
佳子「あんた、ちゃんと仲間に入れてあげなさいよ。これ、タカシ君のぶん」
ともう一つ弁当を渡す。
ユウト「うるさいな。ちゃんと面倒見てるよ。いいからもう」

(しょくどう)

- (48)【クラスメイト】志乃「き、き きゆ」
紙に書く志乃。『きかせてー』
加代「……やだ」
志乃「な、な、なんで！」
加代「別に人に聴かせるためにやってるわけじゃないし」
志乃「お、お、お、お、お、おね、おね！」
加代「やだっつーの！ しつこいな！」(志乃)

疑似独話に現れた形容詞の多くは感情形容詞や評価形容詞である。これは「話者の心情を表わす」や「羨望を表わす」「聞き手への不満を間接的に表す」などの意図に関わっているからだと考えられる。また、聞き手への評価を疑似独話の形で下す場合もあるが、これは対他的意志のタイプの〈相手状況評価〉に繋がっているのである。

4.3. 独話の場合

聞き手が存在せず、話者が独り言を発話する場合の例は本調査では用例がわずか10例のみだった。

- (49) 塀を乗り越えるチカ。手を滑らせ、背中から落ちる。
チカ「いった……」(愛妻)
(50)【教師と生徒】野島「いいから早く行ってこい！」
ドアをバタンとしめる野島。
まりあ「うわ、マジ鬼畜！ ありえない」(ホテル)

(49)では、話者が痛覚を訴えており、(50)では、話者が物事への認識を言語化している。

5. 考察

5.1. 表現意図と現れる形容詞の意味のタイプの相関関係

4.1節の表2を改めて見てみると、話者の表現意図と、その表現意図を実現する際に用いられる形容詞の意味のタイプに偏りがあることがわかる。〈禁止〉〈依頼〉〈挨拶〉の場合、用例数は多くないが、属性形容詞・感情形容詞の例はなく、もっぱら評価形容詞の例だった。ただ、現れた語は、「良い」「悪い」「大丈夫」「うるさい」「だめ」などかなり限られたものになっている。これは、これらの語の多くは、評価形容詞の中でも、意味的にもっぱら価値判断そのことを表すのに関係があるように考えられる。

5.2. 〈相手状況評価〉と評価形容詞

〈相手状況評価〉のタイプに文に現れる評価形容詞の例が、評価形容詞の例全体の21%を占めている。それに対して、同じ〈相手状況評価〉における属性形容詞と感情形容詞のそれは、それぞれ12%と8%であり、前者と比べて割合がかなり低い。このことから、話し言葉において、評価形容詞の、属性形容詞・感情形容詞と区別する特徴の一つは、相手の状況の評価することで、相手と何かしらの関係性を築くことだといえるだろう。ところで、評価形容詞・属性形容詞・感情形容詞3者とも、〈告知・返答〉の例がもっとも多く観察されているが、〈告知・返答〉は会話における基本的な形なので、おのずと用例数が最も多くなるのだ。

5.3. 擬似独話の場合

擬似独話(147例)の場合、評価形容詞、感情形容詞、属性形容詞の用例はそれぞれ72例、49例、26例だった。擬似独話において、評価形容詞、感情形容詞が多く使われていることがわかる。野田(2006)によれば、擬似独話は話し手が直接に聞き手に向けて発話するのを避けて、間接的に自分の評価、感情を発話することで、聞き手への信頼・羨望・不満などさまざまなことを伝える表現効果があるのであった。本稿の観察結果はと擬似独話に関する野田(2006)の指摘に沿ったものであると言える。

6. まとめ

本稿では、映画シナリオの形容詞文を集めて、話者の表現の意図と形容詞の意味の種類の間を見つめた。本稿の考察によって、話し言葉において、評価形容詞は属性形容詞・感情形容詞と比べて、〈禁止〉〈依頼〉などの文に用いられることがあり、〈相手状況評価〉において多く使われていることが明らかになった。これは評価形容詞と属性形容詞・感情形容詞を区別する特徴の一つと考えられる。ただ、本稿における表現の意図の間につながりや精密化については考察が不十分だった。今後表現の意図について考えを深めていきたい。また、本稿では話し言葉の資料としてシナリオを用いたが、実際の話し言葉コーパスの資料も検討する価値があると思う。さらに、書き言葉での使用状況を調査したうえで、話し言葉、書き言葉における評価形容詞と属性形容詞・感情形容詞との相違点を明らかにしたい。

張舒鵬 (ちょう じょほう、ZHANG Shupeng)
東京外国語大学大学院博士後期課程

参考文献

- 尾上圭介 ([1975]2001) 「呼びかけの実現—言表の対他的意志の分類」『国語と国文学』52
巻12号 (再録: 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版)
- 尾上圭介 (2014) 「文の種類」『日本語文法事典』日本語文法学会 大修館書店
- 国立国語研究所 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

- 張舒鵬 (2016) 「『評価形容詞』の設定－「思ウ」認識動詞構文による試案－」『東京外国語大学日本語教育年報』20 東京外国語大学日本専攻
- 張舒鵬 (2019) 「形容詞の種類と連体修飾のあり方について」『言語・地域文化研究』25 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
- 仁田義雄 ([1997]2009) 「未展開文をめぐって」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房 (再録：仁田義雄 (2009) 『仁田義雄日本語文法著作選 第2巻 日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房)
- 野田春美 (2006) 「疑似独話が出現するとき」『日本語文法の新地平 2 文論編』益岡隆志ほか編 くろしお出版
- 宮崎和人 (2002) 「第4章 認識のモダリティ」『新日本文法選書4 モダリティ』仁田義雄ほか編 くろしお出版
- 宮地裕 (1960) 「I 表現意図」『話しことばの文型1) 一対話資料による研究一』国語国立研究所 秀英出版
- 宮地裕 (1963) 「II 表現意図」『話しことばの文型2) 一独話資料による研究一』国語国立研究所 秀英出版
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版

用例出典

- いずれも『月刊シナリオ』(シナリオ作家協会)による作品である。
- バス：『ミッドナイト・バス』加藤正人2018年2月号
- モリ：『モリのある場所』沖田修一2018年6月号
- 志乃：『志乃ちゃんは自分の名前が言えない』足立紳2018年8月号
- しょくどう：『こどもしょくどう』足立紳・山口智之2019年4月号
- 愛妻：『喜劇 愛妻物語』足立紳2020年10月
- ホテル：『ホテルローヤル』清水友佳子2020年12月号
- 子供：『子供は分かってあげない』2021年9月号
- 若者：『明け方の若者たち』小寺和久2022年2月号
- 思い出した：『ちょっと思い出しただけ』松居大悟2022年3月号